

編集部おすすめ

BOOK LOOK

カギを握るミトコンドリア

一見、豊かな文明生活を享受しているかのような日本。しかし、こと健康という観点からいえば、なんともお寒い状況にあるのは、読者もご承知の通り。難病・奇病の増加、医療過誤や病院不信、社会的には肥大化し続ける医療費や保険医療制度の破綻など。本書はそうした問題点を、歴史的・医学的な視点からわかりやすく解説する。

さらに、長年、東大病院などで臨床医と研究医の両面から実績を積んだ著者は、「クーラーや冷蔵庫で皮膚や胃腸を冷やし、口呼吸と働き過ぎの睡眠不足が、膠原病やガン、アトピーなど多くの免疫病を引き起こしている」と訴える。

免疫病の発生メカニズムとして、生命活動の基本を司るミトコンドリア（細胞内の小器官）に着目し、冷え・口呼吸・睡眠不足が、筋肉のエネルギー物質やホルモンなど神経伝達物質を作りだすミトコンドリアの重要な働きをいかに阻害するかを、やや専門的に説明している。実体験に即した臨床例からは、現代医療のいかさまぶりが面白いほど浮き彫りにされる。

また、本書の前半では、日本の医療がおかしくなった経緯が史実にさかのぼって指摘され、かなりの読みごたえがある。明治時代の北里柴三郎や森鷗外など著名な医学者の主導権争い、また戦後の安易なアメリカ医学の輸入、60年代の大学紛争による東大医学部の内部崩壊など、医師の目から見た医学崩壊の原因は、私たちに様々な示唆を与えてくれる。

